

## 「中世における密教と諸思想の交流」

田戸大智（早稲田大学）

日本密教の潮流が、空海（774～835）の活躍以降、東台両密の思想的交渉により新たな展開を迎えたことは、これまでの研究により明らかにされてきたが、三論宗や法相宗などの諸宗との交流の実態については、今後解明されなければならない重要な課題であると言えよう。

南都と密教の関係については、醍醐寺を開山した聖宝（832～909）が東大寺に東南院を建立して三論宗本所とし、興福寺においても定昭（906～983）が一乗院を創建して大覚寺と兼帯するなど、南都諸大寺が次第に密教化していったことは既に指摘されている。また、格式の高い三講（宮中最勝講・仙洞最勝講・法勝寺御八講）が 11 世紀から 12 世紀にかけて創設され、東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺などでも寺内法会が隆盛となり、学派間での論義が執行されたことで、必然的に諸宗兼学が重視されるようになったことにも留意する必要がある。

本発表では、東大寺三論宗にて修学の対象であった浄影寺慧遠撰『大乘義章』20 巻に関する論義書である『大乘義章抄』と『義章問答』の内容を参照しながら、中世における密教と三論宗の交流を成仏の速疾性という観点から推論することにした。

『大乘義章抄』は、東大寺東南院で三論宗を学び、東密小野流の秘奥を継承した寛信（1084～1153）が、東大寺の三論宗徒による「大乘義章三十講」の内容を抄筆したものと推測され、身延文庫に 13 冊が所蔵されている。そして、これとほぼ同時代の『大乘義章』に関する論義を集成したのが頼超（～1182～）撰とされる『義章問答』であり、巻 2 の一本が東大寺図書館、巻 3・4・5 の三本が正倉院聖語蔵に現存している。

これらの両写本には、共通の問題が論義の対象とされているところも見出され、どちらも東大寺三論宗という学派の中で編纂されたものであることは確実であろう。また、『義章問答』には、「勸修寺已講」（寛信を指すか）や「珍海」（1091～1152）、あるいは寛信の師僧である「覚樹」（1081～1139）など、『大乘義章抄』にも示される記名が同じく認められ、その全てが三論宗だけでなく密教も修学している学僧であることから、恐らく頼超も密教の知識を保持していたと考えられる。要するに、この当時、東大寺の三論宗徒は、その殆どが密教僧という側面を持っていたのである。

上記のことを踏まえつつ、特に注目したいのが、頼超が三論宗の要点に関する論義をまとめた『玄疏問答』3 巻という著作の中で成仏の速疾性を問題視しているという点である。同様のことは、珍海の著作類にも説示され、こうした議論が実は密教の成仏論を念頭に置きながら醸成されたと推測することも可能であるように思われる。

以上の如く、密教と諸思想の交流の一端として、特に成仏の速疾性という見地から三論宗との関連性について検討を加えていきたいと考えている。

キーワード：玄疏問答、頼超、珍海